



『つるかめ助産院』

評者・みつい ひろみ フリーライター

妊娠出産を描く小説は、数多く出版されているが、「助産」という切り口からきっちり助産師を描き、産むことの喜びを紡いだ物語を私は初めて読んだ気がする。

失踪した夫を探して南の島にたどり着いたまりあが、偶然道端で助産師の鶴田亀子先生と出会い、「よかったらうちで一緒にお昼食べてかない?」と誘われるところから話は始まる。ちっとも幸せそうではない、まるで固い石ころを身体にいっぱい詰めているようなまりあは、おなかに赤ちゃんを宿していた。

「つるかめ助産院」には、大輪のひまわりが咲いたように笑

う助産師をめざすベトナム人のパクチー嬢、海から魚を釣ってくる歯抜けの長老、畑仕事を手伝う世界一周の旅の途中だという青年サミーなど個性豊かな人たちが出入りしている。まぶしいばかりの「いつでもウェルカム!」が、ここを訪れる人のところを幸せにする。

つるかめ先生は妊婦さんを「おなかに命を育む人」と呼んでいる。いい言葉だ。「赤ちゃんって、その場にいるだけでみんなを幸せな気持ちにするでしょう? その赤ちゃんを宿しているんだから、育む人も一緒。そこにいるだけで、空気がぼわーんとまあるくなるの。赤ちゃんと身一つでいられるなんて今しかないんだし、貴重な妊婦ライフをもっともっと楽しまなきゃ!」とポーンと太鼓判を押すつるかめ先生は

助産という切り口から産む喜びを紡ぐ物語



小川 糸 著

定価 1470 円(本体 1400 円+税 5%)

四六判/集英社/2010 年

太陽みたいな笑顔で、捨て子だった私が母親になれるだろうか、子どもを愛せるだろうかという、まりあの不安な気持ちを溶かしてくれる。まるで光合成のような人だ。でも、その明るい光は、いちどは真っ暗になった太陽だった。若い頃に自分の意思で堕胎した経験、病院の産科で死産した子を取り上げた経験、無事に生まれない命もあることの痛みを知った女性を選んだ助産師人生だから、見事な青空を広げてくれる。

「赤ちゃんだって、そんなに簡単に、母親にはならせてくれないのよ。出産に至るまでの過程で、少しずつ少しずつ無駄な

ものに気づいたりしながら、リセットされていくの。産むことが大事なんじゃなくて、産むまでのプロセスが重要なよ」と助産師にその言葉を語らせた著者は、新しい命を育みながら、自分の生を性を取り戻すことを伝えたいと言いかえてもよい。そして、誰かのそばにいて、手を差し伸べることで、人は人の温もりになれるということをするすべての人に与えてくれた。誰だって、幸せになるために、この世に生まれてくるのだ。

読み終わったら、朝になっていた。からだの隅々まで温かさがひろがり、やさしさに染まっていくのを感じた。小川糸さんの、周りの世界に対する感謝と喜びが詰まった言葉に、きらきらした涙がこぼれる。育む人には、ぜったいに幸せでいてほしい、そんな思いがあふれ出てくる。